

キャンパス通信 ippeki



01 特集1/
遥碧祭・アステイ祭

～KDNS・国際シンポジウム・ミニオープンキャンパス～

03 特集2/
地域連携活動

学年紹介

05 4年生／3年生／2年生／

06 1年生／大学院／

インドネシア国立アイルランガ大学短期交換留学プログラム

07 キャンパス日記

09 2017 (H29) 度ランチョンミーティング開催状況

10 看護部長からのメッセージ／研究室訪問

第14号
2017.10 ▶ 2018.3



ひとりを見る目、その目を世界へ



日本赤十字九州国際看護大学

Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School



遥碧祭・アステイ祭

～KDNS・国際シンポジウム・ミニオープンキャンパス～

KDNS(Kyushu Disaster Nursing Study group:九州災害看護研究サークル)のこれまでのおもな活動

2016年4月 (4月14日 熊本地震)

- ・学生復興支援委員会 発足
- ・学内にて赤十字に所属する看護学生として、私たちにできることはないか]学生約50名、教職員によるフリーディスカッション
- ・募金活動

5月 ・募金活動 ・学内にて活動報告

6月 ・益城町にある福祉避難所にてボランティア活動

7月 ・オープンキャンパスにて活動報告、パネル展示、熊本県の益城町の野菜(トマト、キュウリ、スイカ)を販売

10月 ・災害時の支援活動及び平穏時の防災知識を備え、学生間の防災意識を高めることを目的としてKDNSと改称
・福岡県宗像市総合防災訓練に参加

12月 ・熊本県益城町 仮設団地内の集会所に移動図書館を開設
毎週末サークルメンバーの数名が図書館へ常駐

2017年7月 (7月九州北部豪雨災害)

- ・オープンキャンパスにて活動報告

8月 ・募金活動 ・九州北部豪雨災害ボランティア活動[日田(大分)、朝倉(福岡)]
・NHK福岡放送局にて募金活動の様子が放映

9月 ・ミニオープンキャンパスにてパネル展示による活動報告 ・福岡県宗像市総合防災訓練に参加

11月 大学祭にて熊本、朝倉の野菜販売等

2017年11月5日(日) 本学大学祭「遥碧祭」にてKDNSサークルは、次の4つを企画し、実施しました。

- ☆熊本・朝倉の野菜と果物の販売
- ☆大学芋の販売
- ☆益城町のお母さん達の手芸品販売
- ☆心肺蘇生法とAEDの体験コーナー



平成29年度 国際シンポジウムを開催しました

11月5日(日)、「世界の朝食 - 今日を作る朝食 -」をテーマに、本学の大学祭と同日に国際シンポジウムを開催しました。

近年、若い世代で朝食を食べない人が増加しており、20代の男女では2~3割程度が朝食を食べていないとの内閣府の報告もあります。

そこで、今年度の国際シンポジウムでは、朝食の大切さを、学生や教職員はもちろんのこと、大学祭に来場される多くの方にも知ってもらい、周囲の人へも伝えてもらうこと、また、看護学生として、朝食の大切さを様々な視点から多くの方に伝え、特に若い世代である学生に健康的な朝食を食べよう推奨することを目的に開催しました。

1部では、テーマの趣旨、日本の朝食、出店したロシア料理「ボルシチ」の紹介をしました。今回ボルシチを選んだ理由は、季節の変わり目で寒さを感じるこの時期、最も寒い国のひとつであるロシアのあたたかい朝食をみなさんに食べてもらいたいと考えたからです。2部では食と健康に関するクイズ大会を開催、3部ではクイズの正解数が最も多い先着5名にボルシチ無料券を配布しました。そして最後の4部で質疑応答タイムを設けました。

企画にあたり、誰もが楽しめる参加型形式にしたいと考え、実行委員メンバー全員で内容を深く議論しました。限られた時間の中で伝えたいことをまとめ、準備を進めていくことはとても大変でしたが、私たち自身も朝食について多くの情報を得ることができました。参加者やメンバー全員、楽しみながら開催することができ、良い経験となりました。



ミニオープンキャンパスを開催しました

11月5日(日)に大学祭「遥碧祭」と同時開催しました。学生のサークル活動やたくさんの催し物を見ることができ、多くの高校生や保護者が来場されました。特に入試相談・奨学金コーナーでは、熱心に話を聞きながら相談されていました。また、キャンパスツアーにも多くの方が参加し、本学の施設を見学されました。参加者から「やはり直接見ることによって学生たちの活動や大学の雰囲気を感じることが出来てたいへん良かった」との声が多く聞くことが出来ました。



本学では、宗像市、地域コミュニティ運営協議会及び各種協議会と協働し、学生及び教職員が、以下のような地域貢献活動を実施しています。
 学生さんと一緒に行うイベントもあるので、ぜひ一緒に地域で活動していきましょう!

本学主体での地域貢献活動

平成29年度 前期公開講座(平成29年7月30日開催)

「子育てはおなかの中から始まっている」「子どもの危ないを知って、子育て上手になろう!」

本学のオープンキャンパスと同日開催で、「子どもを育てる力・見守る力」をテーマに「平成29年度前期公開講座」を開催しました。前期の講座では、胎内育児、生まれた子どもたちへの育児について講義が行われました。当日は、22名の地域の皆様にお越しいただき、有意義な時間を過ごすことができました。講義終了後の質疑応答では、活発な意見交換が行われ、本学と地域の皆様との交流の場となりました。

ご参加いただきありがとうございました。

平成29年度 後期公開講座(平成30年2月14日開催)

「家族になろう～不妊治療で授かった子どもとともに～」

後期の講座では、「いのち」をテーマに取り上げ、不妊治療において他者の支援を受けざるを得ない状況や、国内外の生殖補助医療(卵子提供)の現状、子どもを授かった後の親子関係や社会からの偏見、子どもへの真実の告知など、様々な苦悩を背負っている実情について講演していただきました。少子高齢化時代において様々な課題に対し、医療福祉と社会が協力しながら支援体制を整備する必要性を感じ、不妊治療の実態や社会が抱える問題を知り得る機会となりました。



宗像市との地域貢献活動

夏の課外授業inむなかた2017

8月23日(水)に本学実習室で小学生の親子を対象とした課外授業を開催しました。「Tシャツに体の中を描いてみよう」をテーマに当日は、17組38名の親子に参加して頂きました。聴診器を使って胸やお腹の音を初めて聴いてみて「聴こえた!」「すごい!」という子どもたちの驚きが見られました。また、「身体の仕組みを知ることができて良かった」「体の音を初めて聴いた」という子どもたちの感想や「子どもとたくさん話げできた」という保護者からの感想も聞かれ、親子の交流や笑顔溢れるイベントになりました。普段はTシャツに落書きをすると怒られますが、いきいきとペンを握る子どもたちの姿がとても印象的でした。



(2017年2月1日現在本学登録講座)

ルックルック講座

ルックルック講座とは宗像市(窓口:コミュニティ協働推進課)が市民に講師を派遣する出張講座です。本学では健康増進やヘルスリテラシーの向上に役立つ12講座を登録しています。これまで、市内で研修会、学習会に講師として多数の講師を派遣しご好評をいただいております。今後も随時新しい講座を登録していく予定です。最新情報は宗像市のホームページでご確認ください。

▼ 講座テーマ	▼ 講座名	▼ 担当者
1 健康	健康な足づくりのためのフットケア	姫野穂子
2 健康	認知症を予防しよう	姫野穂子
3 健康	ロコモを予防しよう	田邊綾子
4 健康	感染症予防について	金森弓枝
5 健康	人工透析についての基礎知識	中村光江
6 福祉・介護	認知症のこと、認知症を持つ人のことを知ろう	乗越千枝
7 福祉・介護	介護する人・される人が安楽な介助方法	乗越千枝
8 医療	脳死と臓器移植の現状について	看護継続教育センター
9 医療	あなたは大切な人の命を救えますか	看護継続教育センター
10 医療	うつ病の人への接し方	高橋清美
11 子育て・教育	知って安心、孫育て、子育てのコツ	大重育美
12 子育て・教育	他では聞けない!保育園や家庭で起こりやすい子どもの事故	大重育美

ワクワクWORK

本学では、「自立し、かかわりを深める子ども」を育成する目的で、宗像市教育委員会が企画する市内中学生職場体験事業「ワクワクWORK」に協力しています。

平成29年度は、9月11日(月)～15日(金)の5日間、城山中学校2年生5名(レストランアスティへ3名、図書館へ2名)が参加し、職場体験活動を行いました。

参加者からは、仕事の大変さやお客さんへの感謝の気持ちが芽生えたと感想をいただきました。



地域コミュニティとの地域貢献活動

赤間西コミュニティまつり

11月12日(日)赤間西コミュニティセンターにて赤間西コミュニティまつりが開催されました。本年度、はじめて、赤間西コミュニティ健康福祉部会と本学との合同企画として「健康づくりコーナー」、子供向けイベント「妖怪トンネル」に参加しました。

健康づくりコーナーでは健康福祉部会の方々、本学学生と教員による血圧測定、血管年齢測定、握力測定、骨密度測定を実施しました。来場者は105名で測定結果を見ながら日頃の食生活や運動習慣について相談をされる方の姿も多く見られました。

赤間西コミュニティまつりでの健康づくりコーナーが地域の方々の健康づくりにすこしでも役立てば幸いです。



よしたけ八福神めぐり

吉武地区では、子どもから高齢者、障がい者などすべての人が「みんなの居場所」として、ひとときを過ごすことを目的に、毎年10月に八福神めぐりが開催されています。本学は、車いす参加者のサポートなどを行うボランティアとして参加しました。

参加した学生は、本イベントへの参加を通して、地域住民同士の交流が地域で安心して生活するためのネットワークづくりへと発展していることを学んでいました。



各種協議会との地域貢献活動

認知症カフェ

7月13日(木)に本学にて「認知症カフェin日赤看護大学」を開催し、地域の皆様をはじめ、多くの関係機関の方々にお越しいただきました。

当日は、講座「認知症の人の理解」や専門職による相談コーナー、呼吸筋ストレッチ体操、音楽レクリエーションなど、認知症に対する理解を深めるための様々なイベントを行い、参加者からは、「とても良かった」「役に立った」等のお声をいただきました。今後も地域の皆様とともに健康づくり活動に取り組めると幸いです。



むなかた子どもまつり

11月3日(土)、本学が所在する宗像市内にある3大学等から構成される「むなかた大学のまち協議会」として「むなかた子どもまつり」にブース出展を行い本学からは学生3名、職員2名が参加しました。

このイベントは、今年度で5回目の参加となります。今年は「こども赤十字救護服・ナース服体験コーナー」と「心肺蘇生法(AED)体験コーナー」を設置しました。

救護服の試着で、参加者に平成29年に発生した九州北部豪雨や平成28年に発生した熊本地震での支援活動時に実際に救護員が着ていたものと同じデザインであることを説明し、災害時の赤十字の活動について知ってもらうことができました。また、ナース服試着では、ワンピース型のナース服を用意し実際に試着してもらうことで看護師という職種に少しでも興味を持ってもらえる機会になったのではないかと思います。

心肺蘇生のコーナーでは、多くの子どもたちと保護者の方々が来場し、実際に本学学生や赤十字救急法指導員の資格を持つ職員がモデルを用いて説明を行い、みなさんが真剣に取り組んでいる様子が印象的でした。また、初めてAEDを目にする子どもたちが戸惑いながらも胸骨圧迫と人工呼吸、AEDの実施を行っている姿をみて、とても頼もしく感じました。

今回の活動をきっかけに一人でも多くの方が赤十字の活動に関心を持ち、ともに人道の精神に基づいた活動のできる仲間が増えることを願います。



アスティ祭「健康応援コーナー」

平成29年11月5日、本学にてリサーチパーク内の企業との合同企画である「アスティ祭」が大学祭「遥碧祭」と同時開催されました。アスティ祭における「健康応援コーナー」では本学教員による骨密度測定や血管年齢・内臓脂肪測定、血圧測定、健康相談を実施しました。今年度は「口から食べること」のテーマで健康情報を提供し、嚥下機能向上のためのストローを用いた呼吸法の紹介や塩分測定などの体験の場を設けました。参加者は測定結果や健康情報の説明を受けながら、日々の食生活や運動習慣などについて相談される方も多く、日頃的生活習慣を見直す機会になっていました。



「むなかた大学のまちゼミナール」公開講座

本学は毎年、宗像市と市内3大学の連携、協力による無料公開講座「むなかた大学のまちゼミナール」を開催しています。今年のテーマは「観光」で、2名の講師がそれぞれ違った切り口で講演しました。

講座1では菅原特任講師が、近年増加傾向にある観光を目的とした海外渡航に際し注意すべき健康管理について「海外旅行における健康管理」と題して講演しました。留意点を出発前、移動中、滞在中そして帰国してからに分けて説明し、持参薬や予防接種、エコノミークラス症候群予防、防虫対策に加え、渡航前に必要な情報を得られる便利なウェブサイトの紹介など、実用的な内容を話しました。

講座2では鈴木教授が、「観光人類学からみた地域と観光」について講演しました。

文化人類学の視点から観光と地域を考えるため、人間特有の文化、社会、経済現象について話をしました。観光は非日常を期待し、旅への要求や願望が増大するようになるため、観光客を受け入れる側にとってはその期待に応えられるかが問われると問題提起しました。

参加された方々は活発に質問をし、講演中もメモをとるなど、大変興味を持たれた様子でした。



地域連携室員全員紹介



東先生 後藤主事 上野先生 金森先生
乗越地域連携室長 田邊先生 有安先生 清末先生 西村先生



4
年生

Class Introduction

卒業研究発表会

1月12日(金)卒業研究の最優秀論文2件、優秀論文3件の発表会が開催されました。

最優秀論文の1件目は「熊本地震の復興支援に関するアクションリサーチ※1」をテーマに発表がありました。看護学生として何かしたいとの強い思いから、復興支援委員会を立ち上げ、実施してきた活動と、アクションリサーチを通してその活動を改めて見直し、災害時の情報収集の重要性を感じたとの発表でした。同じく最優秀に選出された2件目は「一次救命処置を実施したバイスタンダー※2の精神的影響と体験の否定的位置づけ」とのテーマで発表がありました。文献から得られた事例と、消防本部・本署に勤務する救急隊員に面接を行って得たデータを、質的に分析した結果から考察、課題が述べられました。細かに丁寧に分析された内容に、発表を真剣に聞く3年生の表情が見られました。最優論文の後、続けて優秀論文3件の発表もありました。

最後に、3年生から看護師国家試験を間近に控えた4年生へ、発表してくれたことへの謝意と、これから看護研究に向けてしっかり取り組んでいきたいとの感想があり、学部長からは、どれも学会で発表できるくらい優れた内容だとの講評がありました。

- ※1 社会活動で生じる諸問題について、小集団での基礎的研究でそのメカニズムを解明し、得られた知見を社会生活に還元して現状を改善することを目的とした実践的研究。
- ※2 救急現場にその居合わせた者。実際一次救命処置を実施した者だけでなく何らかの形で救援活動に関与した者も含む。職業や一次救命処置の知識、実施経験有無は問わないとしている。(著者本文より)



3
年生

Class Introduction

卒業研究発表会に参加して

1月12日(金)に行われた卒業論文発表会に参加しました。発表会の開催時、私たち3年生はいよいよ卒業研究に本格的に取り組み始める時期となり、領域別相談会に参加しそれぞれが関心のあるテーマを検討している段階でした。

先輩方が研究テーマを決定した背景や、リサーチクエストをもとにした研究方法の決定、研究プロセス、研究結果について発表してくださいました。発表会に参加したことで、不安を感じていた研究テーマからのリサーチクエストのたて方や卒業研究への取り組み方が明確化しました。先輩方の発表を聞き、早い時期から自身の関心のあるテーマの先行研究を読み、より明確なりサーチクエストをたてるのが大切であると感じました。また、先輩方から最高学年として大学生活を送るにあたっての心構えについても言葉をいただき、良い刺激となりました。同じゼミの仲間と高め合い、先生方にご指導いただきながら、卒業研究に取り組んでいきたいと思えます。

国家試験前のお忙しい中、発表準備を行い発表して下さった先輩方に、感謝申し上げます。



2
年生

Class Introduction

レベルⅢ慢性看護実習をおえて

2年生111名は1月22日(月)～2月6日(火)(土日を除く12日間)にわたり、福岡赤十字病院をはじめとする医療施設においてレベルⅢ慢性看護実習に臨みました。本実習は2年生の集大成ともいえる科目であり、その目的は、「慢性期を持つ個人とその家族が病気や障害とともに生きる過程を全人的に理解し、長期的な視点を持って個別性に応じた看護を学ぶ」ことでした。

学生たちは慢性病をもつ対象者を受け持ち、病気とともにこれまでどのように生きてこられたのかを捉え、看護計画の立案、実施、評価という一連のプロセスを実践しました。「患者さんのために自分にできることは何か」を悩み、これまで学内で学んだ知識をフル活用しながら日々の実習に取り組みました。患者さんが必要としている情報をわかりやすく明示したパンフレットや内服薬チェック表を作成し、これを活用した指導を実施した学生もいました。

実習をおえた学生からは「慢性病を持つ患者さんの生活の実際を知ることができた」「個別性を踏まえた支援の在り方を考えることができた」といった声が聞かれました。実習成果への達成感を感じる一方で、全体像を捉え個別性を考慮した計画の実践には知識と技術が不可欠であることを実感し、学習不足やコミュニケーション能力の未熟さなど自己の課題を認識した学生もいました。3年生後期からのレベルⅣ実習にむけ、取り組みが必要な点を明確にできたようです。

Class Introduction

1年生が模擬患者さんに血圧測定や腹部の診察を実施しました

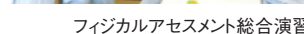
宗像市食生活改善推進会のみなさまに模擬患者として協力していただき、身体診察を実施しました。学生同士の演習ではないため緊張も強く、血圧測定も腹部の診察も失敗の連続でした。しかし、得られた学びもとても大きく、看護の勉強をがんばる動機づけにもなったようです。

以下、学生の感想を紹介します。(フィジカルアセスメント科目担当 黒田裕美・小手川良江)

普段学習をしていると、自分一人で頑張っているということに目がいていましたが、今回の模擬患者さんとの演習を通して改めて気づいたことがありました。それは周りの方々の支えがあってこそ今の自分が成長できているということです。模擬患者さんをしてくださった方から「頑張ってるね。私で良ければいつでも協力するからね。」と声をかけていただき、温かさを感じ、自分達のほうが支えられていると思いました。もちろん技術や重要事項が不足しているところも知ることができました。しかし、それ以上に大切なことに気づくことができ、とても良い演習になったと感じました。

1年生 西尾 悠

フィジカルアセスメント総合演習



今回、自分の学習がテストにしか対応できないものになっていくと気づきました。患者さんを意識した学習が大切だと感じました。半年後の実習では自分で患者さんを受け持つことになります。今のままでは正確に測れないので、患者さんを不安にさせてしまうかもしれません。実習まで半年あることを幸いと思い、しっかり勉強したいです。今回、模擬患者役をしていただいた方に恩返しができるような看護師になりたいです。

1年生 麥生田 麟

Class Introduction

平成29年度 春季研究計画発表会を開催しました

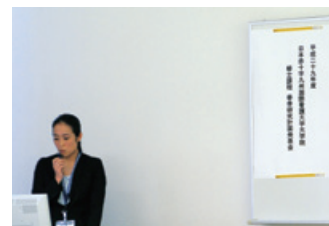
2月23日(金)に「平成29年度 春季研究計画発表会」が開催されました。

11月の相談会で頂いたご意見を参考に、指導教員にご指導を受けながら計画書を作成して参りました。そのため、少しずつテーマや内容等も焦点化でき、また同期の計画書をお互いに目にしたことで、改めて刺激となりました。

発表会に向けて、何度も計画書を検討していく中で、文献を読み込み、自分が行う研究にはどのような背景があるのかを掴むことが重要でした。さらに、それを他者が理解できるよう言語化することが重要であると感じました。

先生方からは具体的なアドバイスを頂きました。今後は研究における倫理を考慮し、研究方法が具体化できるよう、研究計画書の追加・修正を行っていきたいと思います。

振り返ると、1年があっという間に過ぎました。しかし、研究計画書が形になることに嬉しさを感じ、今後の1年、2年はさらにあっという間なのかもしれません。先生方や先輩方、そして同期の支えに感謝し、引き続き研究に取り組んで参りたいと思います。



Class Introduction

インドネシア国立アイルランガ大学短期交換留学プログラム

本学には海外の提携校との交換留学プログラムとして、インドネシア国立アイルランガ大学短期交換留学プログラムがあります。今年も11月1日(水)から11月10日(金)の10日間にかけて、アイルランガ大学教員1名(メンタルヘルス領域)と学部生2名(2年生1名・3年生1名)を受け入れました。

本年度の研修目的は「持続的な開発目標(SDGs)に関わる保健医療問題への理解の促進」で、関連した講義と施設見学を組み合わせたプログラムを準備しました。実際には、災害看護や研究方法論など5コマの講義の受講、1年生のフィジカル・アセスメント演習への参加と老年看護学習として西野病院(北九州市)の見学を行いました。インドネシアの教員や留学生たちからは、日本の看護・医療・文化について様々なことを知ることができ、自国の保健医療を考える上で良い学びになったとの感想をいただきました。また、休日には多くのボランティア学生とともに福岡市内や北九州市内を観光し、本学の学園祭にも参加するなど、大いに文化交流を楽しんでいただきました。

教員の交流としては、アイルランガ大学のユスフ先生から「インドネシアにおける精神医療の現状について」というテーマで講義いただきました。普段知る機会のないインドネシアの精神医療事情について説明いただき、本学の教員と学生にとって非常に興味深い内容だったと思います。

3月には本学から教員1名と1年生2名がアイルランガ大学へ派遣される予定です。こちらも充実した体験となることを期待しています。

4年生 生活治療方法(統合編)を終えて

私たち4年生は生活治療援助方法(統合編)の授業において、専門性のある看護職者として必要な知識・技術などの能力が身につけているか客観的評価を行うとともに、自らの課題解決に向け取り組むことを目的とした演習を行いました。演習では2事例の看護過程を展開し、対象に必要とされる看護計画を立案します。また、立案した看護計画をもとに対象(患者)への看護援助を3名1グループで行いました。

演習後には2事例のいずれかの事例について技術試験があります。学生は看護師役、介助者役、患者役に分かれ、提示された対象の状況を素早くアセスメントし、必要な物品の準備や観察、ケアを決定し看護援助を実施します。試験中は限られた時間の中で、対象の状況を考慮し優先すべきことは何かを決めること、正確かつ迅速にケアを提供することの難しさを実感しました。試験では、技術の手順や方法を思い出したり考えたりすることに精一杯で、対象への配慮が十分に出来ませんでした。

この授業で学んだことは、看護を行う上で、看護者側からの一方的な援助を提供するのではなく、それは対象が望んでいるものであるのかどうか、安全・安楽を常に考えながら行う必要があるということです。看護者は医療職者の中でも最も長く患者と接するため、患者の意向や気持ちを汲み取ることできる立場にあります。患者のニーズや個性を尊重した援助をしていくことの重要性を改めて考える機会になりました。残り少ない学生生活ではありますが、患者のニーズや個性を尊重した援助を行うことができる看護者に近づき、精一杯頑張っていきたいと思います。



技術試験1:試験前の集合写真
「これから試験ベッドに移動します」



技術試験2:試験中の様子
「状況設定を読解し、援助を実施します」



技術試験3:試験中の様子
「観察もしっかり行います」

本学学生が「全国大学ビブリオバトル九州A, Bブロック地区決戦」に出場しました

11月25日(土)に九州女子大学(北九州市八幡西区)で行われた「全国大学ビブリオバトル九州A, Bブロック地区決戦」に、本学2年生の庄司 結さんと森 駿哉さんが出場しました。

この大会は、大学生がお勧めの1冊を紹介し、どの本が一番読みたくなったかを聴衆の多数決によって決定するもので、今回が8回目の開催です。当日は、北部九州地方から7大学16名の学生が集い、それぞれが勧める本について書評合戦を繰り広げました。

本学の2名の学生は、緊張は見えつつも、堂々と熱のこもったプレゼンテーションを披露してくれました。また、聴衆から投げ掛けられる質問にもしっかりと自分の言葉で答えている様子が印象的でした。

森さんは惜しくも準決勝敗退、庄司さんは決勝まで進みましたが、首都決戦への出場はなりません。終了後は、「とても楽しく、貴重な体験ができた」「もっと早くビブリオバトルを知りたかった」と感想を語ってくれました。



全国大学ビブリオバトル2017～首都決戦～に本学学生が出場しました(繰り上げ出場)

12月17日(日)、大学生による知的書評合戦「全国大学ビブリオバトル2017～首都決戦～」が東京の大手町で開催され、2年生の庄司さんが九州北部ブロック代表のひとりとして出場しました。これまで8回行われた全国大会のうち、本学学生の出場は4回目です。当日は全国各地の予選会・地区決戦(参加学生1,160名)を勝ち抜いた36名の参加者が6組に分かれて準決勝を行い、勝者6名による決勝戦が行われました。

庄司さんが紹介した本は、ヴァンホーナッカー、マーク著/岡本由香子訳「グッド・フライト、グッドナイト:パイロットが誘う最高の空旅」です。現役のパイロットである著者が、彼の愛してやまない空と飛行機に対する熱い思いをロマンチックな表現で綴ったこの本を、庄司さんも熱を込めて語ってくれました。投票の結果、僅差で決勝出場とはなりませんが、多数の聴衆の前での発表は、本人にも良い経験となったようです。

以下、庄司さんの感想を紹介します。

この大会は、全国各地から大学生がさまざまな本を持ち寄って紹介し、投票により、どの本が一番読みたくなったかを決めるものです。発表された本は、どれも読んでみたいと思わせるものばかりで、また、プレゼンの仕方も様々で、大変いい刺激を受けました。私の紹介した本についても沢山の質問や感想をいただけて、嬉しいかぎりでした。本を通じて全国各地の大学生と交流できたことは、とても楽しく、価値のある体験だったと思います。また機会があれば参加したいです。

今後も、学内で小規模のビブリオバトルを開催していく予定です。「人を通して本を知る。本を通して人を知る」がキャッチコピーのこのゲーム。学生の皆さん、お気に入りの本を持って参加してみませんか。



福岡県日赤紺綬会第58回総会に参加しました

11月15日(水)、私たちは日本赤十字社副社長臨席のもと、ヒルトン福岡シーホーク(福岡市)で開催された福岡県日赤紺綬会58回総会に参加しました。この紺綬会は毎年行われており、日本赤十字社福岡県支部に多額の社資を頂いた方や、紺綬会の発展に功績のあった方に対して表彰状や表彰楯の贈呈が行われます。

赤十字は人道の精神および国際性にに基づき、紛争等の犠牲者支援・災害復興支援・保健衛生支援事業など、紛争や災害被災に苦しむ人々に手を差し伸べる支援を継続して行っています。国内では平成29年7月に発生した九州北部豪雨に対する支援をはじめ、国外ではドミニカ共和国を襲ったハリケーン、メキシコ地震などに対する支援など、世界的に幅広く活動を行っています。

こうした赤十字活動は全て国民の皆様の大なる善意(社資・寄付金)で成り立ち、支えられているのだということを、今回紺綬会に表彰者の案内役や介助役として登壇させていただき改めて実感しました。また総会では、戦前に使用されていた救護服である黒衣(式服)を纏いました。黒衣に込められた奥深い歴史に思いを馳せ、その精神を私たちが受け継いでいくのだという重みを感じることが出来ました。

赤十字の看護学生でしか参加できないこのような貴重な機会を与えて頂いたことに感謝し、卒業までの期間、悔いのないよう学業に励んでいきたいと思えます。



災害救護演習を行いました。

11月29日(水)に本学4年生が日本赤十字社福岡県支部や災害ボランティアの皆様にご協力いただき、災害救護演習を行いました。今回の演習は、「災害と看護」の科目の中で行われ、演習の前には、講義のなかで救護所の運営の実施やトリアージ方法などについて学びました。

演習の事前準備として、私たちは2グループに分かれ、災害によって約50名の被災者がでたことを想定し、救護所の運営方法の検討を2週間かけて行いました。私たちのグループでは、メンバーをトリアージ班、エリア別救護班、搬送班、本部に分け各班で必要となる知識・技術の確認を行いました。救護班では、受傷した被災者に対し処置を行うため、赤十字救急法の中から三角巾を用いた包帯の仕方を主に復習しました。また、事前に救護所となる弓道場の下見をサブリーダーが行い、入り口の幅や道場の間取りを確認しながらエリアをどのように分けていくか話し合いました。準備期間中には各班のリーダーとサブリーダーが中心となり、当日の運営がスムーズに進むよう検討を重ねていきました。

演習当日は生憎の雨模様でしたが、震度6の地震によって駐車場や実習棟裏の芝生などの周辺で傷病者が出たことを想定した演習を行いました。どちらのグループも傷病者に駆け寄り、状態を確認し、トリアージを行い、汗をかきながら毛布を担架の代わりにし救護所に搬送を行っていました。救護所の中では、搬送されてきた傷病者の再トリアージを行いながら必要な処置を行っていました。事前練習の成果もあり、三角巾を用いながらの止血や、段ボールなどのその場にある物品を用いて骨折の固定を行っていました。このことから学生は、混乱する現場でお互いに声を掛け合いながらそれぞれが自らの役割を全うし、出来ることを見つけていくことが重要であると考えました。また、実際に傷病者役を体験し、軽傷であることから搬送や治療が後になったことで、不安が大きくなり救護者に見捨てられたような感覚を持つことを知りました。このことから、混乱する現場の中でも、傷病者に与える不安が最小限になるように、重症の方を優先しているが後から助けが来ることや、次に行く処置の説明などの声掛けを行うことの重要性を学びました。

救護所運営の演習の後には炊き出し体験を行いました。袋にお米と水を入れ空気を抜きながら口を輪ゴムで止める作業は思いのほか難しく、お米をこぼしそうになりながら準備しました。ご飯のほかに保存食のカレーや煮込みハンバーグ、サバの味噌煮も大きな鍋で温め一緒に試食しました。想像以上においしく炊き上がり、みんな笑顔で食べていました。

春からは赤十字病院をはじめ、それぞれの道に分かれて看護職者としての人生が始まります。仲間とともに本学で学んだ赤十字の人道の精神を忘れずに、災害時にはすぐに災害モードに切り替えることができるような看護職者になりたいです。

最後に今回の演習でご指導いただきました日本赤十字社福岡県支部の皆様、赤十字防災ボランティアの皆様にご心より感謝申し上げます。



愛楽園での実習

今回、「専門性強化実習」ということで愛楽園にきました。見知らぬ土地で二週間も一人で大丈夫かと不安でしたが、入所者の素敵な笑顔や明るさ、スタッフの皆さんの暖かさや優しさに救われながら楽しく実習をする事が出来ました。

ハンセン病のことや愛楽園の歴史、実際の入所者の生の声を聞くことができ、感じる事や学ぶ事が多くありました。私のなかで大きかったのは、ハンセン病への暗いという印象が一変して、楽しい事や幸せな事もあったという事実を知れたことです。本当に多くのことを学ばせていただき感謝しています。ありがとうございます。入所者の皆さんが今後も和やかに過ごし、素敵な愛楽園であり続けますように願っています。



三味線に合わせて踊りました。



皆さん、これからも和やかに過ごしてください。

2017(H29)度 ランチョン ミーティング 開催状況

luncheon meeting

今年度第1回目のランチョンミーティングは「海外で働く先輩と話そう」を目的に開催されました。

今回のゲストスピーカーの橋爪亜希さんは、本学2期生です。

橋爪さんは本学を卒業後、都内の赤十字病院へ就職し、助産師として勤務経験の後、アメリカ留学され公衆衛生修士課程を修了されました。

2015年3月まで本学成育領域小児助手として勤務し、2016年10月からはJICA専門家としてラオスに派遣されています。



〈第2回〉



ランチョンミーティングの詳細ページはこちらからご覧ください。

〈第9回〉



第2回目のランチョンミーティングは昨年の国際保健・看護Ⅱの受講者10名が、海外研修の様子を他の学生や教職員に広く知ってもらうことを目的に発表しました。

9回目は、国際交流協定校の1つであるタイ赤十字看護大学から2名の先生の訪問がありましたので、welcome企画として「タイ赤十字とタイ赤十字看護大学」、「タイ人の健康問題」についてお話していただきました。



	開催日	講師	テーマ
1	4月19日(水)	橋爪亜希	先輩リターンズ 第一弾「JICA専門家として～ラオスの現場より～」
2	4月25日(火)	谷口美紀・濱迫仁美 他	国際保健・看護Ⅱベトナム研修報告会
3	5月19日(金)	有浦旭香 他	スイス・ジュネーブにおけるUNHCR, IFRC, ICRCの訪問
4	6月16日(金)	菅原直子	南部アフリカ地域HIV/エイズ感染症対策支援事業モニタリング報告
5	7月13日(木)	三亀恭子	マザーテレサ施設でのボランティア体験記
6	7月30日(日)	谷口美紀・濱迫仁美 他	国際保健・看護Ⅱベトナム研修報告会
7	11月24日(金)	守山正樹・山本幸治	タイと日本で価値観を問いかける試み
8	12月8日(金)	苑田裕樹	JICAインドネシア看護実践能力強化プロジェクト「シミュレーション教育を伝えてきました!」
9	1月17日(水)	タイ赤十字看護大学教員2名	タイ赤十字について

看護部長 からの メッセージ

M E S S A G E

わたしたちと一緒に
赤十字の未来をつくりましょう

大分赤十字病院
看護部長 **横井 直美**



当院は大分市の中心部に位置し、地域の中核病院として、救急・災害医療、がん診療、生活習慣病の急性期診療を使命とし「地域に信頼され、選ばれる病院」を目指しております。

超高齢社会において、病院完結型から地域完結型の医療が求められる中、地域で生活する患者さんやその家族を支援するため、医療連携・患者支援センターを中心に、併設の訪問看護ステーションと連携をとり、外来・病棟・地域を結ぶ切れ目のない看護を実践しています。

看護部の基本方針は「患者・家族、看護職員の安全・安心・安楽の追求」です。人間の尊厳を守り、患者・家族、看護職員の安寧を追求する基本方針を堅守しながら、時代に即応した質の高い看護の提供に取り組んでいます。

そのために、職員1人ひとりが「人財」として成長し、自身の役割を自覚し、持てる力を一杯発揮できるように、キャリア支援、WLBの推進に取り組んでいます。一人ひとりが、やりがいをもって生き生きと働き続けることが出来る、そして、看護の喜びを感じ、輝き続けることが出来る職場にしていきたいと考えています。

いま、皆さんが踏み込もうとする看護の世界は、奥が深く、興味が尽きない、魅力あふれるものです。そして皆さんは今、色々なことにチャレンジできる大切な時間を過ごしています。“One for all. All for one” 絆を強く、志を高く、学生時代を楽しんでください。



そのような人材を育成するために、平成29年に「国際看護コース」を開設しました。本コースは学位授与の能力に加え、卒業までに高いレベルで1. 適応力、2. 異文化間コミュニケーション能力、3. 文化能力、4. 国際協力・協働の能力を獲得できるよう科目を設定しています。現在7名の学生が学んでいます。互いに切磋琢磨しながら、国籍、人種、文化、職業、言語などを問わず、赤十字の「人道」を主体的かつ創造的に実践し、人々の健康および福祉に貢献できる人材に育ってほしいと願っています。興味のある人は、ぜひ国際コースにチャレンジしてください。

一方、国内に目を向けるとグローバル化の進展に伴い、訪日・在日外国人の数は年々上昇し、彼らに対する保健医療サービスも増大しています。また、EPAに基づく外国人看護師・介護福祉士の受け入れも拡充しており、保健医療福祉分野での外国人との協働は自明です。つまり国内においても国際協力と同じような状況に遭遇することになります。

本学は「国際」を標榜する赤十字の看護大学です。将来は国際協力にかかわりたいと希望をもって入学する学生も多いと思います。しかし、「国際」の名がつく大学で学べば国際協力で従事できるわけではありません。国際分野で働くためには、語学力に加え看護師として自立して仕事ができること、自己の課題を明確にでき、課題を克服し能力を向上するために努力ができることが求められます。

国際看護を担当している小川里美です。本学には平成25年6月に赴任しました。それまでは京都第二赤十字病院で看護師長として勤務しながら、赤十字国際委員会（ICRC）が展開する武力紛争地域での医療活動に従事してまいりましたが、現地の看護の質向上の必要性を痛感し、自身がかわった任務の大半は看護管理、特に看護の人材育成でした。

国際看護領域 教授
小川 里美 先生

研究室訪問





大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになって一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。

「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：吉田 歩さん（平成26年度 学部卒業生）／福岡県・柏陵高校出身



日本赤十字九州国際看護大学

Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行：日本赤十字九州国際看護大学 企画情報室

〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地
Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

<https://www.jrckicn.ac.jp/>

寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。